

一橋大学財務リーダーシップ・プログラム
(HFLP) フォローアップ・セッション①

財務諸表の基礎

2020年8月22日
一橋大学 加賀谷哲之

本講義の狙い

本プログラムでその育成を目指している「財務リーダー」は、財務・会計の知識・スキルを基礎として、企業価値向上のための変革を担うことができる人材と位置づけることもできる。

- ① 定量的な数値を基礎として、自社の将来を構想できる。
- ② 企業の将来あるべき姿に照らして、現状の課題を定量的に分析・評価、整理したうえで、解決施策を提案できる。
- ③ ①と②に基づき、現場社員を巻き込み、経営改革を推進することができる。

企業分析・評価

M&A

EVA

事業ポートフォリオ管理

税務計画

経営戦略論

投資家との対話・エンゲージメント

リスク管理

本プログラムでの狙いを達成するために、本プログラムでは各領域の最前線でそれらを実践している有識者に講演をいただき、受講者の皆様と討議いただくよう講義を設計。

→これまでファイナンスや会計に関する講義を受講した経験がない受講者の皆様、経理・財務・IRなどといった業務にかかわられてこなかった受講者の皆様のために、受講いただくにあたって一定レベルの知識・スキルアップの場を設定する必要がある。

フォローアップ・セッションの位置づけ

財務諸表の基礎

損益計算書、貸借対照表がどのようなプロセスで作成されており、各勘定科目がどのような内容を示しているのかを理解いただくためのセッション。テキスト『新・現代会計入門(第4版)』をお読みいただくにあたっての前提知識をレクチャーする。

財務会計

『新・現代会計入門(第4版)』の中で、企業経営者の視点から知っておいていただきたい内容についてレクチャーする。特に「事業の言語」を経営者としていかに活用すべきかを意識した講義構成とさせていただきます。

企業価値評価

企業価値経営の実践のためには、御社の現状の企業価値の現状を分析・評価できることが前提となります。本講義では、実際にExcelを活用いただき、御社の企業価値を測定いただいたうえで、価値創造にあたっての課題を整理いただきます。

財務諸表の基本イメージ

会計学をイメージしてみよう

妹(娘)の結婚

あなたの妹さん(お嬢さん)がある男性と結婚したいといいました。あなたは、妹さん(お嬢さん)が結婚後も苦労しないようにと、冷静な目線で相手の男性の経済面からのチェックを入れてあげようと考えています。相手の男性は、人柄は申し分なく、どんな細かい内容でも喜んで答えるといっています。

そこで、あなたは、下記の状況について質問することにしました。

・月収		・株式	
・ボーナス		・別荘	
・マンション		・生活費	
・マンション購入のための借金残高		・家電製品	
・アルバイト収入		・両親への仕送り	
・車		・外食費	
・車のローン残高		・タンス預金	
・銀行の預金残高		・友人へ貸したお金	
・両親からの借金		・税金	

項目をストックとフローに分けてみよう(ストックにはSを、フローにはFを記入)

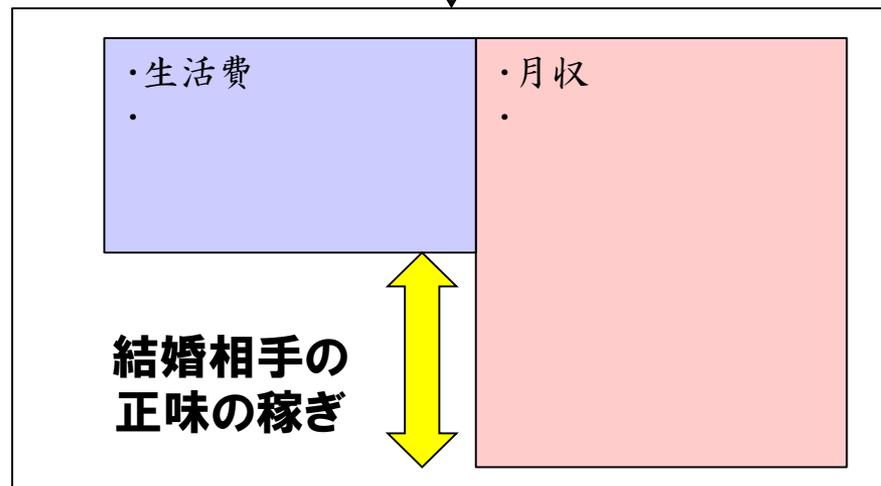
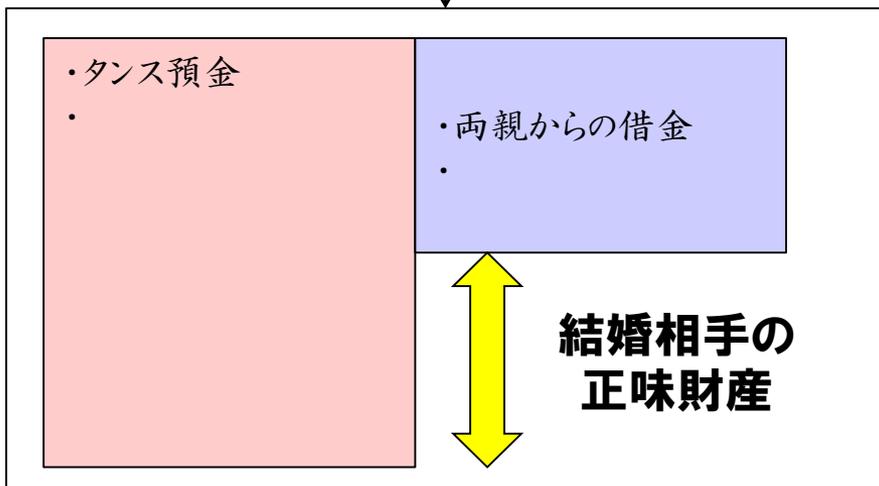
会計学をイメージしてみよう

貸借対照表と損益計算書のイメージ

・月収		・株式	
・ボーナス		・別荘	
・マンション		・生活費	
・マンション購入のための借金残高		・家電製品	
・アルバイト収入		・両親への仕送り	
・車		・外食費	
・車のローン残高		・タンス預金	
・銀行の預金残高		・友人へ貸したお金	
・両親からの借金		・税金	

ストックの財産を左に、
負債を右に

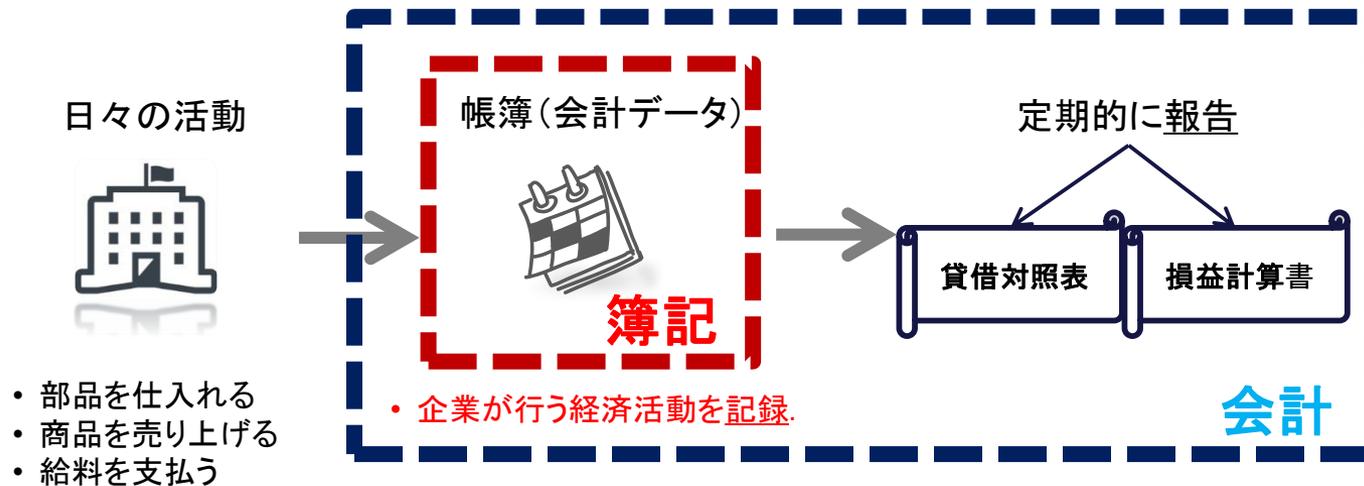
フローの支出・損を左に、
儲けを右に



財務諸表の作成プロセス

会計 (Accounting) の中の簿記 (Bookkeeping)

「**会計**」とは、企業が行う膨大かつ複雑な経済活動や事象を一定のルールに従って**貨幣額**に変換し、それをもとに**財務諸表 (Financial Statements)**を作成し、**報告**する一連の手続きのこと。



「簿記とは、日々の活動を、**一定のルール**に従って整理し、帳簿に**記入**することです」(p.2)
“記録計算方法” (「基本会計学用語辞典改訂版」)

簿記の目的は、企業が行う経済活動を**記録**すること

複式簿記そのものの起源は、ヴェネツィア商人による東方貿易

最終的な主な報告の形態

➤ 財政状態を知る

貸借対照表 (B/S: Balance sheet)

財政状態とは、企業活動における資金調達源泉と使途の残高状況
(例、どんな財産や借金があるのか。)

➤ 経営成績を知る

損益計算書 (P/L: Profit and Loss Statement)

企業が日々の活動によってどれほど付加価値をあげているか
(例、どれだけ儲けているのか。)

貸借対照表

- ある一定の期日における財政状態を明らかにするもの。
- どのように分類し、明らかにするか？
 1. 資産 (Asset)
企業の経営活動に必要な財貨や債権、資金使途の残高
 2. 負債 (Liability)
企業が外部に金銭を支払う義務(債務)、資金調達源泉のうち返済義務があるもの
 3. 純資産 (Net Asset)
資産から負債を引いた金額(最初の元手と、その後の利益留保など)

(借方:Debit) 貸借対照表 (貸方:Credit)

資産	負債
	純資産

$$\text{資産} = \text{負債} + \text{純資産}$$

損益計算書

- ある一定の期間における経営成績を明らかにするもの。
- どのように分類し、明らかにするか？
 1. **収益 (Revenue)**
企業活動の成果として財産が増加
 2. **費用 (Cost)**
企業活動の努力として財産が減少

(借方) 損益計算書 (貸方)

費用	収益
利益 (Profit)	

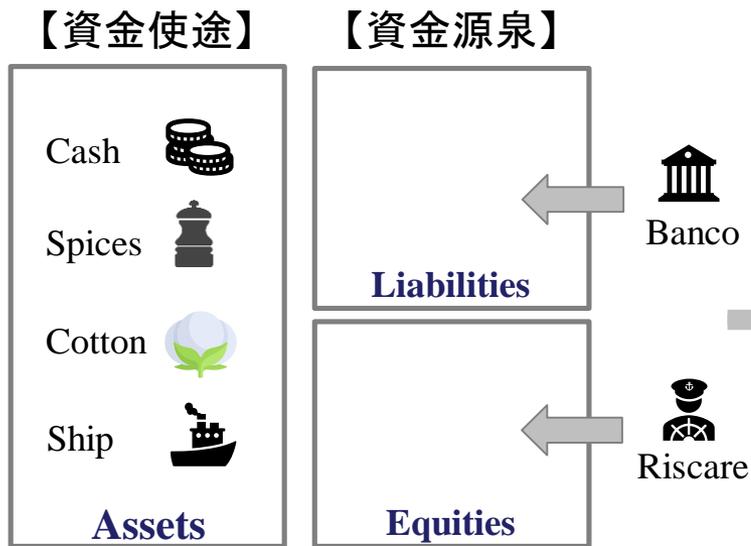
(借方) 損益計算書 (貸方)

費用	収益
	損失 (Loss)

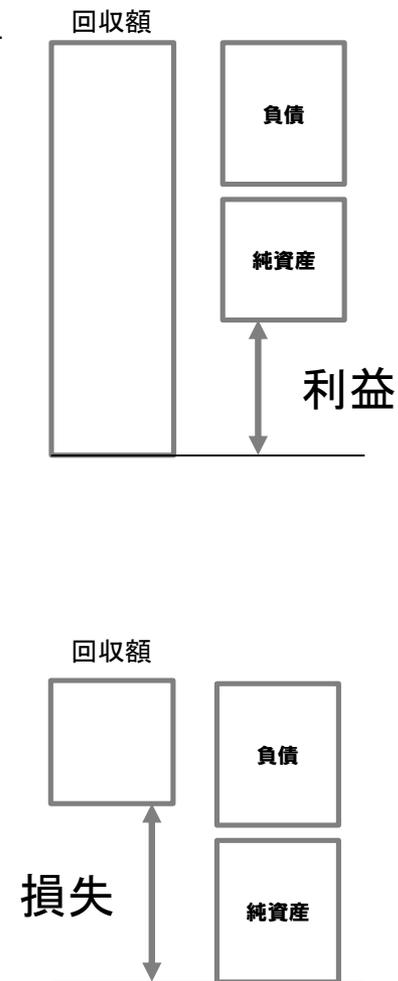
収益－費用＝(当期純利益or当期純損失)

ヴェニス商人にとっての簿記・会計

◆航海前

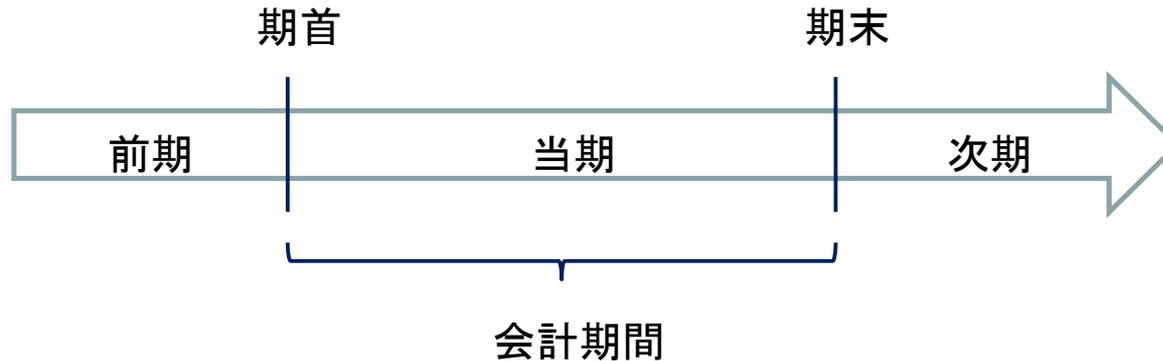


◆航海後



田中靖浩『会計の世界史』日本経済新聞出版社、2018年、41頁をベースに筆者作成。

会計期間



財務諸表と会計期間

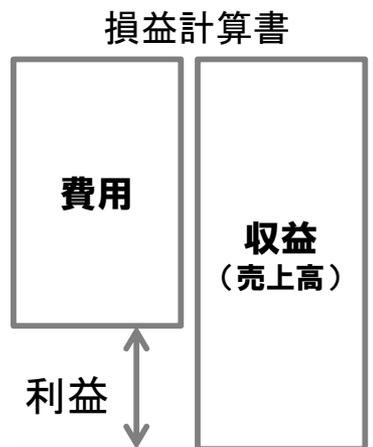
- 貸借対照表
期末「**時点**」での財政状態を報告
- 損益計算書
期中、つまり期首から期末までの「**期間**」の経営成績を報告

→企業活動は、企業の設立時点から清算まで継続している。会計期間を設定することで、報告する時点や期間を区切ることができる。

利益をいかに計算するか？

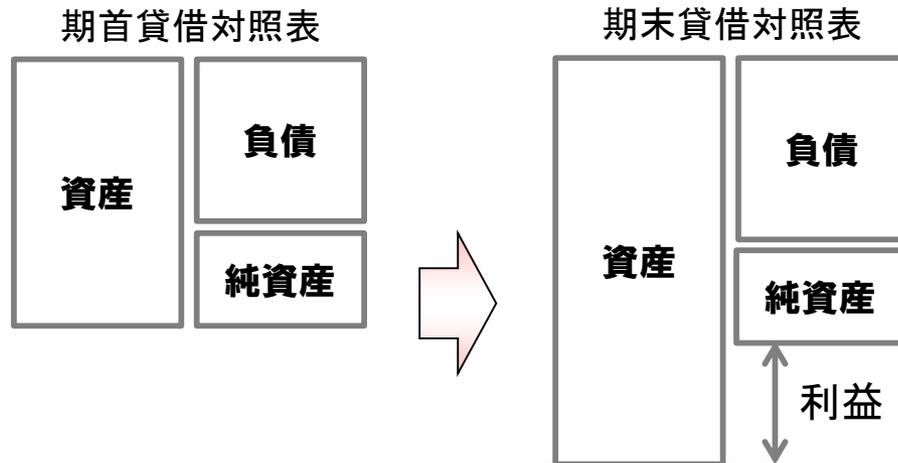
◆収益費用観

どれほど製品・サービスが売れ、それを生産・販売するのにどれほど費用がかかっているのか？



◆資産負債観

企業の正味財産(資産-負債)がどれほど1期間で増加したか？

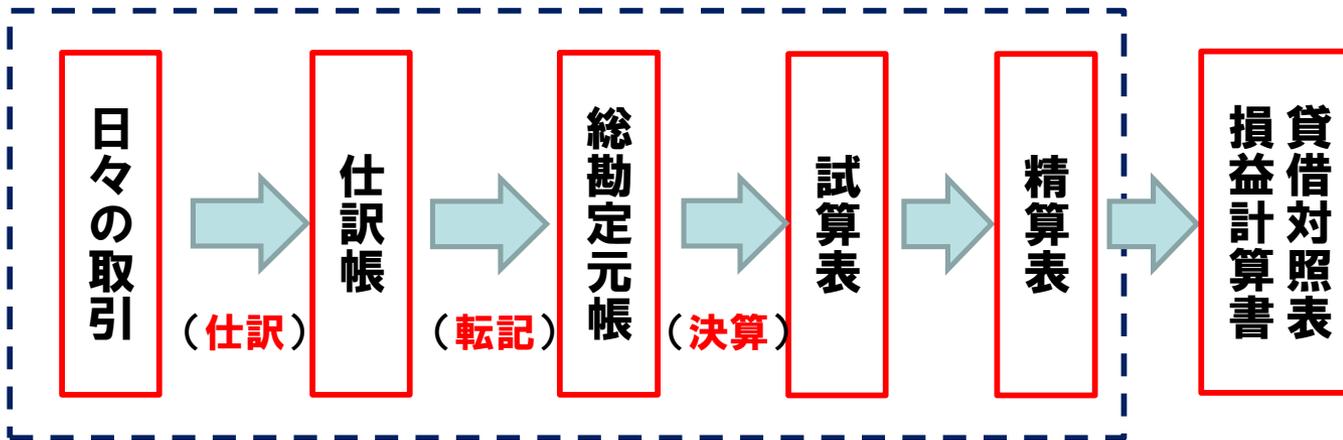


- ✓ 損益計算書というフロー情報を重視した考え方。**費用収益観**。
- ✓ 簡単に言えば、風呂に出し入れた水の量を確かめ、利益とする。
- ✓ 損益法の利益計算を重視。

- ✓ 貸借対照表というストック情報を重視した考え方。**資産負債観**。
- ✓ 簡単に言えば、朝と夜の風呂の水の量を比較し、その差を利益。
- ✓ 財産法の利益計算を重視。

データの流れ

伝統的な説明:「仕訳と転記」



※「日々の取引」を日付ごとに仕訳帳に記述。同時に、現金出納帳など特定の取引を記録する「補助記入帳」と売掛金元帳、商品有高帳など特定の勘定を記録する「補助元帳」を作成。

日々の「取引」

- 簿記における「取引」(Transaction)は、企業の「資産」「負債」「純資産」「収益」「費用」が増えたり、減ったりすることを言う。
- 取引にならないケース
 - ✓ 土地の賃貸契約の締結(経済的な債権債務発生前)
 - ✓ 業務提携契約(経済的な債権債務発生前)
 - ✓ 雇用契約の締結(経済的な債権債務発生前)
- 「取引」を、「帳簿」に、「勘定」という名前をつけて記録する。

会計上の「取引」vs経済上の「取引」

銀行から現金¥1,000千円借り入れた。	
建物を年間¥1,200千円で借りる契約を結んだ。	
商品¥200千円を現金で仕入れた。	
商品を¥400千円の注文をうけた。	
現金¥300千円を紛失した。	
商品を¥420千円で売上げ、お客様に出荷した。	
従業員を月200千円で雇用した。	
火事で建物¥5,000千円が焼失した。	
従業員に給与180千円を支払った。	
銀行と契約し、クレジットライン5,000千円を設定した。	

日々の活動をいかに記録するか？

■家計簿の記録

日付	理由	収入	支出	残高
4/1	給料	250,000		250,000
4/2	教科書購入		25,000	225,000
4/5	授業料		50,000	175,000
4/10	家賃		75,000	100,000
4/10	通信料		10,000	90,000
4/30	交際費		25,000	65,000
4/30	食費		50,000	15,000
4/30	新聞等購読料		10,000	5,000

企業活動については、各取引を**二面的に**解釈することが望まれる → **複式簿記**

(借方) 現金預金	250,000	(貸方) 給料	250,000
-----------	---------	---------	---------

(資産の増加)

(収益の増加)

仕訳

仕訳とは、「取引」を「帳簿」に複式簿記により、「勘定」という名前をつけて記録すること。

- ①左側(借方)と右側(貸方)に情報を記録することに特徴がある。
- ②借方合計額と貸方合計額は必ず同じ金額になる。(貸借平均の原理)

例： 10万円の商品を売上げ、代金10万円を現金で受け取った。

借方:かりかた (現金) 100,000	/	貸方:かしかた (売上) 100,000
-------------------------	---	-------------------------

複式簿記 (Double-entry Bookkeeping) では、全ての取引を**二面性(因果関係)**に着眼し、財産の動きや損益の変化を捉えて複式記入する。

借方と貸方

仕訳で、借方、貸方に何がくるかをどのように識別するか？

- (某会計士) 売上は右手でつかめ、現金は左手で守れ！
- 右手と左手の共通点を見つけておく。

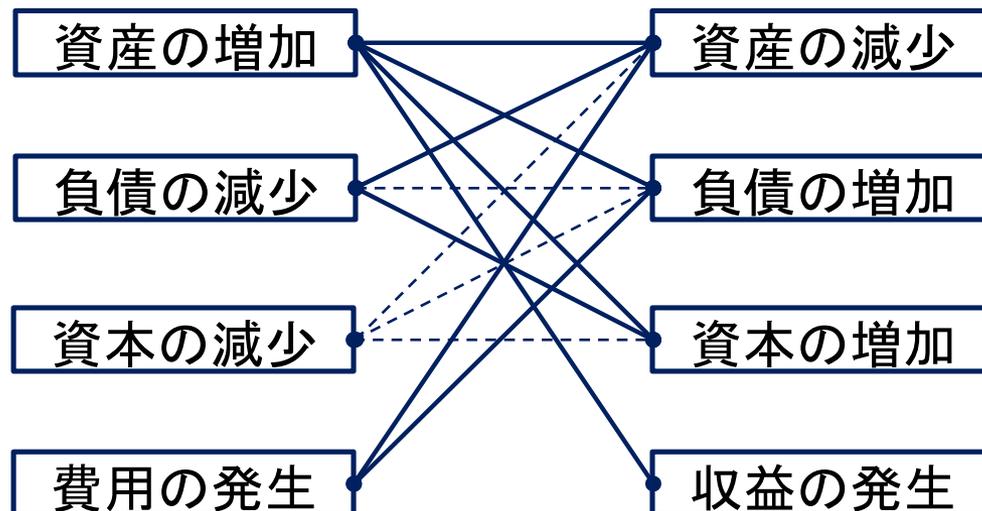
(借方)

(貸方)



借方の要素

貸方の要素



【資金用途】

【資金源泉】

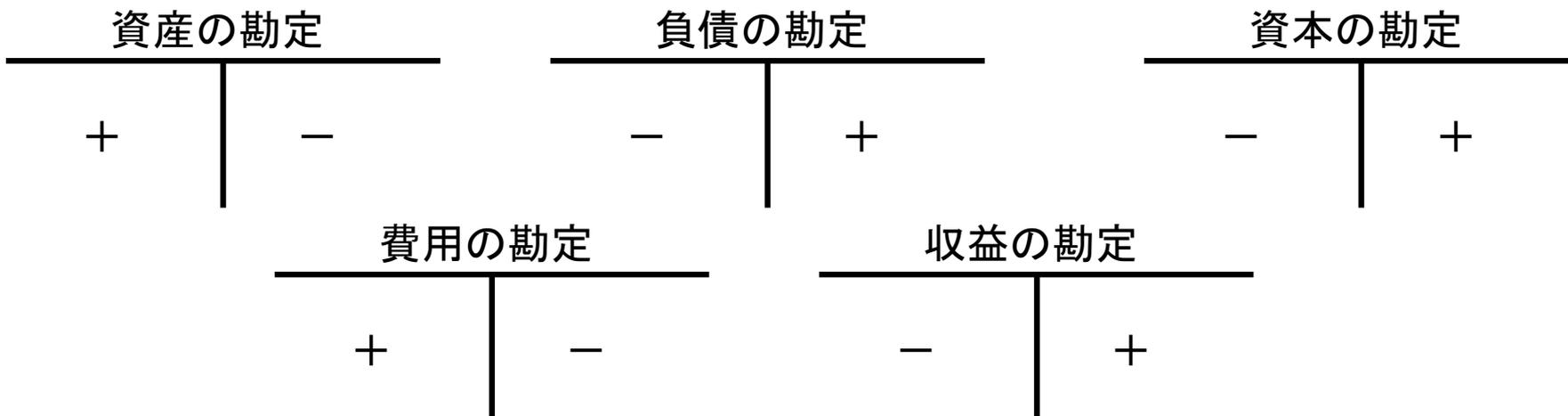
借方と貸方

借方と貸方の関係性

		貸方			
		資産の減少	負債の増加	資本の増加	収益の発生
借方	資産の増加	●	●	●	●
	負債の減少	●	○	●	○
	資本の減少	○	○	○	×
	費用の発生	●	●	△	×

●は恒常的に発生する取引、○は現金等をはさむと発生する取引、△は一部例外的に実施されることがある、×は実施されることはない。

各勘定科目の増減の方向性



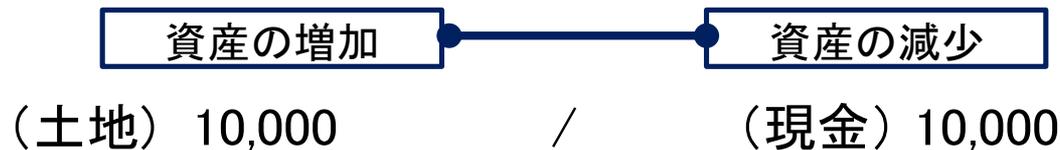
混乱しやすい勘定科目

1	前払保険料	2	前受利息	3	立替金	4	仮払金
5	仮受金	6	未払法人税	7	未収手数料	8	未払金
9	未収金	10	預り金	11	前払金	12	前受金

仕訳の例(資産負債)

•例① 土地を10,000千円を購入し、現金で支払った。

1. 土地という資産が増加
2. 現金という資産が減少



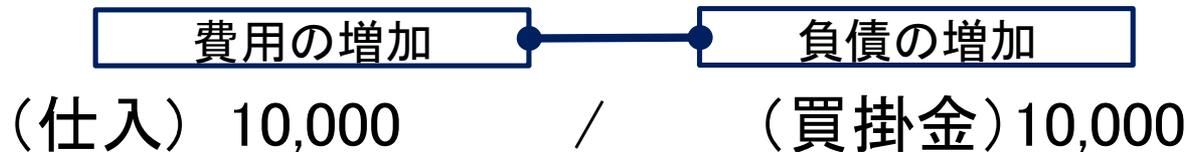
•例② 銀行から5,000千円を借入れ、当座預金に振り込まれた。

1. 借入金という負債が増加
2. 当座預金という資産が増加

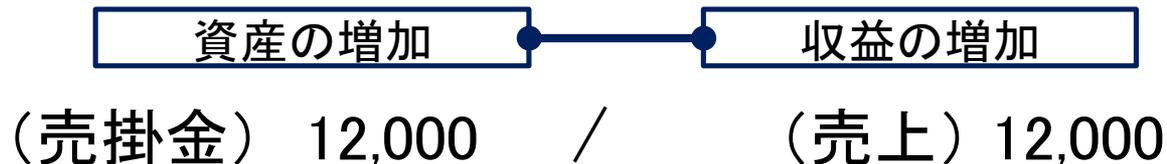


仕訳の例(収益費用)

- 例③ 商品を10,000千円を仕入れ、支払いは掛けとした。
 1. 仕入という費用が増加
 2. 買掛金という負債が増加

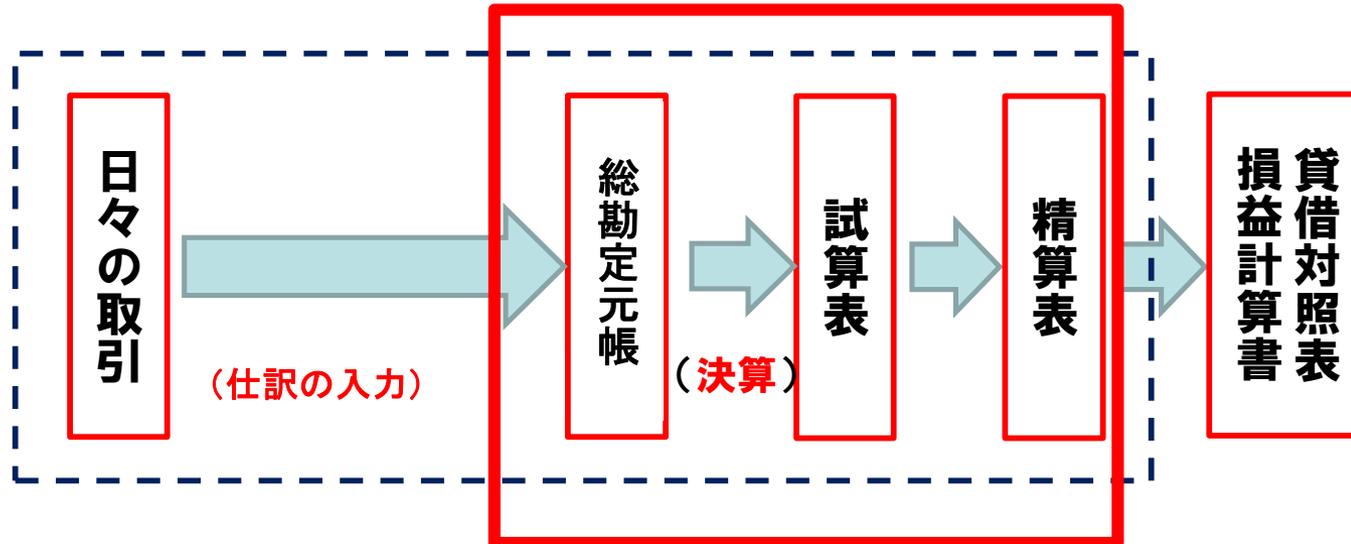


- 例④ 商品を12,000千円で売上げ、代金を掛けとした。
 1. 売上という収益が増加
 2. 売掛金という資産が増加



集計作業の位置

残高試算表の作成



※8桁式では「整理記入」、10桁式では8桁式に整理後残高試算表欄を追加。

集計(仕訳帳→勘定元帳)

仕 訳 帳

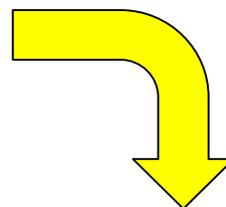
○年	摘 要	元丁	借 方	貸 方
○	(現金)	1	50,000	
	(売上高)	5		50,000
	現金で商品売り上げた			
○	諸 口 (普通預金)			50,000
	(借入金)	2	48,000	
	(支払利息)	5	2,000	
	借入金と利息を支払った。			
			100,000	100,000

• 仕訳帳だけに記録していると...

- 勘定科目の例: 現金、売掛金、商品(棚卸資産)、土地、機械、買掛金、借入金、資本金、売上、受取利息、支払利息

⇒何がどれだけあるかを把握することができない

簿記では仕訳の内容を元に各勘定口座に埋めていくことを転記という。



転記にあたっては主要勘定ごとに集計。総勘定元帳のタイトルにあたる勘定科目について、相手勘定の科目名と金額を相手勘定の逆側のサイド(借方、貸方)に記述。

現金

X/XX	売上高	50,000	X/XX	借入金	48,000
			X/XX	支払利息	2,000
	

集計(試算表: Trial Balance)

- 仕訳から総勘定元帳、合計試算表、残高試算表へのデータの流れ

仕訳				
1/1	現金	5,000	/ 資本金	5,000
2/1	現金	2,000	/ 借入金	2,000
2/15	当座預金	500	/ 受取手数料	500
3/25	給料	400	/ 現金	400

↓ 借方・貸方ごとに合計
(総勘定元帳の合計額を記述)

合計試算表

借方	勘定科目	貸方
7,000	現金	400
500	当座預金	
	借入金	2,000
	資本金	5,000
	受取手数料	500
400	給料	
7,900		7,900

実務で観察する順

残高試算表

借方	勘定科目	貸方
6,600	現金	
500	当座預金	
	借入金	2,000
	資本金	5,000
	受取手数料	500
400	給料	
7,500		7,500

貸借両側に残高
があれば相殺

集計(精算表: Work sheet)

- 残高試算表の値を、「貸借対照表」「損益計算書」のどちらからに振分けていく作業を行う。
- 各勘定が「貸借対照表」「損益計算書」のどちらの項目かは、ストック(一時点の財政状態)かフロー(一定期間の経営成績)かで判断する。
- 下記の精算表は6桁式。実務では8桁式や10桁式などが多い印象。

精算表

勘定科目	残高試算表		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金	5,100				→ 5,100	
買掛金		2,000				→ 2,000
資本金		3,000				→ 3,000
受取手数料		500		→ 500		
広告宣伝費	400		→ 400			
当期純利益			100			100
	5,500	5,500	500	500	5,100	5,100

※当期純利益は、精算表で算出

※8桁式では「整理記入」、10桁式では8桁式に整理後残高試算表欄を追加。

**各取引がいかにかに財務諸表
に影響を与えるか？**

最終的な主な報告の形態

➤ 財政状態を知る

貸借対照表 (B/S: Balance sheet)

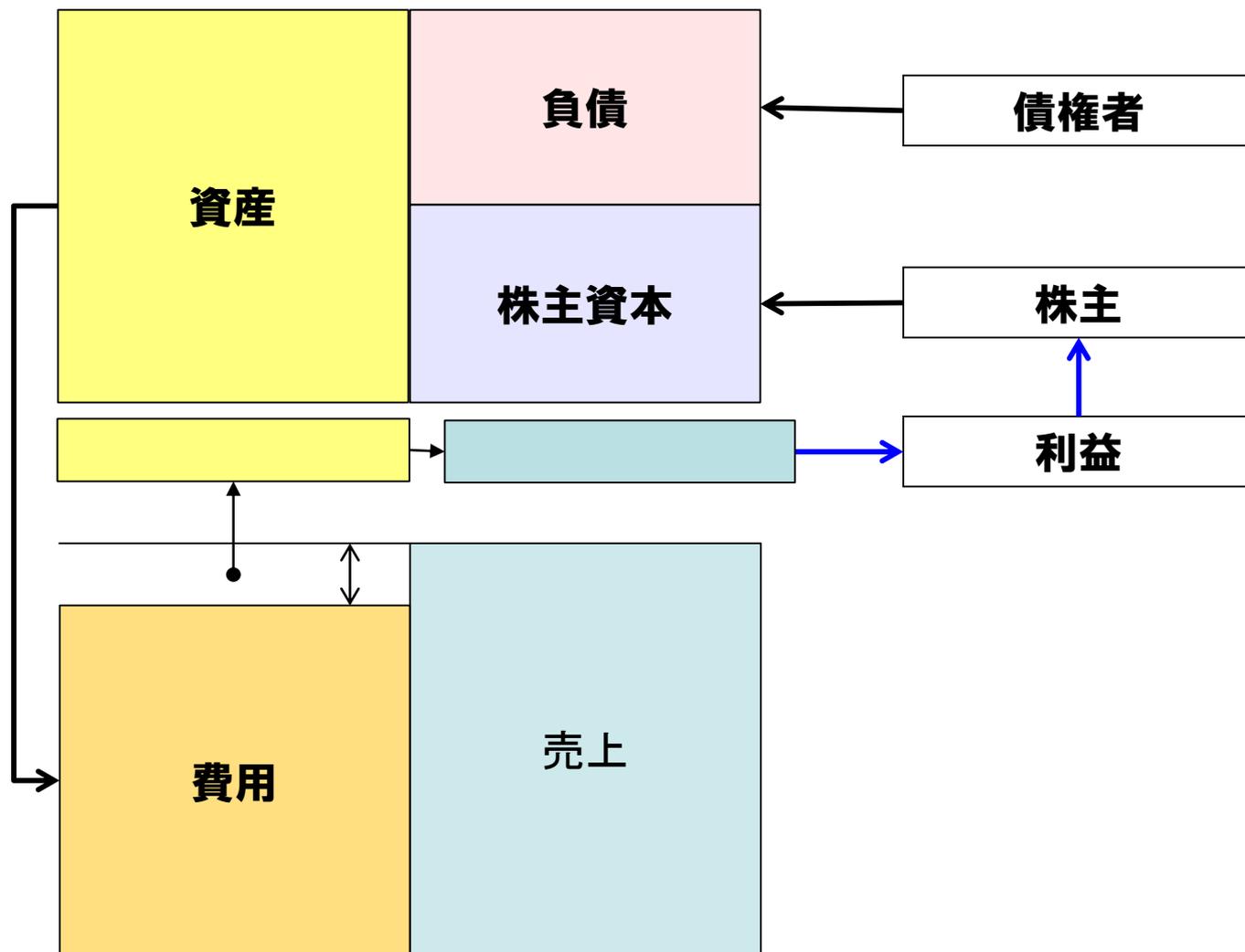
財政状態とは、企業活動における資金調達源泉と用途の残高状況
(例、どんな財産や借金があるのか。)

➤ 経営成績を知る

損益計算書 (P/L: Profit and Loss Statement)

企業が日々の活動によってどれほど付加価値をあげているか
(例、どれだけ儲けているのか。)

企業活動と財務諸表の関係性



- ✓ 企業会計は、資産・負債・株主資本の認識・測定・表示を決定。
- ✓ 企業会計は、売上高、費用の認識・測定・表示を決定。

取引と財務諸表との関係性①

ここでは、シンプルな前提(単一商品・単一価格、法人税なし)で個々の取引がどのように貸借対照表、損益計算書に反映されるかを体感してください。

【取引内容】

- (1)事業を開始するにあたり、株主から300万円を出資いただいた(資本金)
- (2)事務用品を現金10万円で購入した。
- (3)家具・机・本棚等の事務用設備を現金50万円で購入した(5年間)。
- (4)PCやプリンターなど工具器具備品を現金30万円で購入した(3年間)。
- (5)靴200足(原価単価10,000円)を現金で仕入れた。
- (6)靴100足(単価15,000円)を売り、現金150万円を獲得した。
- (7)靴を新たに300足(原価単価10,000円)を仕入れた。現金100万円を支払い、残りは掛け(買掛金)とした。
- (8)靴200足(単価15,000円)を売った。50足分(75万円)の現金を受け取り、残りは掛け(売掛金225万円)とした。
- (9)銀行から運転資金として200万円借り入れた。
- (10)店員に給与を現金で支払った(2名分 80万円)
- (11)テナントに家賃を現金で支払った(20万円)
- (12)銀行に支払利息10万円を現金で支払った。
- (13)事務用設備の当期使用部分10万円を費用計上した。
- (14)工具器具備品の当期使用部分10万円を費用計上した。

貸借対照表

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

◆勘定科目

現金	資本金	事務用品費	
事務用設備	工具器具備品	商品	買掛金
売掛金	借入金	給与	支払利息
家賃	減価償却費	売上	当期商品仕入高
支払利息	期首商品棚卸高		期末商品棚卸高

損益計算書	
売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	

取引と財務諸表との関係性②

(1)事業を開始するにあたり、株主から300万円を出資いただいた。

株主から企業に対して行われる資金拠出は、株主資本の部の資本金(あるいは資本剰余金)に組み込まれる。企業はまずは現金として保有することから現金勘定が増加。事業活動を通じた資金獲得の活動ではないことから、損益計算書には影響しない。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性③

(2)事務用品を現金10万円で購入した。

まずは現金で購入したため、現金が290万円に。事務用品費は当期使い切ってしまうことを前提に購入していることから、資産に計上されずそのまま損益計算書の販管費の項目で費用計上される。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性④

(3)家具・机・本棚・キャビネット等の事務用設備を現金50万円で購入した(5年間)。

家具・机・本棚・キャビネット等の事務用設備を購入したことから、事務用設備の金額が50万円増加。現金で購入したことから現金が50万円減少。家具・机・本棚・キャビネット等は購入した時点では使用しておらず、商品売上などに貢献するのはこれからになるため、購入時点では費用計上しない。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑤

(4)PCやプリンターなど工具器具備品を現金30万円で購入した(3年間)。

PCやプリンターなど工具器具備品を購入したことから、その金額が30万円増加。現金で購入したことから現金が30万円減少。PCやプリンター等は購入した時点では使用しておらず、商品売上などに貢献するのはこれからになるため、購入時点では費用計上しない。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑥

(5)靴200足(原価単価10,000円)を現金で仕入れた。

靴200足を原価単価10,000円で仕入れたため、商品が200万円増加。現金で仕入れたことから現金が200万円減少。ここでは、固定資産以外の処理については会計期間を想定しておらず、都度都度で決算に反映させていることから、期中仕入高200万円がそのまま期末商品棚卸高になっていることに留意されたい。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑦

(6)靴100足(単価15,000円)を売り、現金150万円を獲得した。

靴100足が単価15,000円で売れたため、売上高150万円を計上。売れた分100足分(100万円)を資産の部から減少させる。現金で回収していることから現金の金額が10万円から160万円に増大。商品棚卸高が100足分減少することから、期末商品棚卸高を200万円から100万円に

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑧

(7)靴を新たに300足(原価単価10,000円)を仕入れた。現金100万円を支払い、残りは掛け(買掛金)とした。

靴300足を単価10,000円で仕入れたため、商品300万円増加。現金100万円支払ったため、現金100万円減少。サプライヤーに対して、支払いをつけにもらった場合、それを買掛金とする。将来サプライヤー200万円支払わなければならないため負債。期中商品仕入高、期末商品棚卸高がそれぞれ300万円増加。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑨

(8)靴200足(単価15,000円)を売った。50足分の現金75万円を受け取り、残りは掛け(売掛金 225万円)とした。

靴200足を単価15,000円で売ったため、売上高300万円増加。現金75万円受け取り、135万円に増加、残りはついで売ったため、売掛金225万円増加。商品を買った分、商品200足分(200万円)が減少し、商品200万円に。期末商品棚卸高も200万円に。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑩

(9)銀行から運転資金として200万円借り入れた。

銀行からの借入金200万円を負債の部に計上。現金が入ってきたため、現金は200万円増加し、335万円に。事業活動に関係ないことから、損益計算書は動かず。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑪

(10)店員に給与を現金で支払った(2名分 80万円)

店員に給与を現金で支払ったことから、現金80万円減少。給与は商品の売上に寄与する店員の用役への対価であることから、損益計算書の販管費に計上。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑫

(11)テナントに家賃を現金で支払った(20万円)

テナントへの家賃を現金で支払ったことから、現金20万円減少。家賃は商品の売上のための店舗使用の対価であることから、損益計算書の販管費に計上。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑬

(12)銀行に支払利息10万円を現金で支払った。

借入金に対する支払利息を現金で支払ったことから、現金10万円減少。営業外費用の支払利息を10万円増加。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑭

(13)事務用設備の当期使用部分10万円を費用計上した。

事業用設備50万円は5年間で使用予定。今年分は全体の5分の1とみて、事業用設備10万円を資産の部から減額。使用分は売上高に寄与していることから費用計上。販管費を増加。長期の保有を想定している設備や器具などは減価償却費という勘定科目で費用計上する。

貸借対照表

単位:万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位:万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性⑮

(14) 工具器具備品の当期使用部分10万円を費用計上した。

工具器具備品30万円は3年間で使用予定。今年分は全体の3分の1とみて、講義器具備品10万円を資産の部から減額。使用分は売上高に寄与していることから費用計上。販管費を増加。長期の保有を想定している設備や器具などは減価償却費という勘定科目で費用計上する。

貸借対照表

単位: 万円

資産の部		負債・純資産の部	
現金		買掛金	
売掛金		借入金	
商品		負債合計	
事務用設備		資本金	
工具器具備品		繰延利益剰余金	
		純資産合計	
資産合計		負債・純資産合計	

損益計算書 (単位: 万円)

売上高	
売上原価(①+②-③)	
①期首商品棚卸高	
②期中商品仕入高	
③期末商品棚卸高	
売上総利益	
販管費(①~④合計)	
①給料	
②家賃	
③事務用品費	
④減価償却費	
営業利益	
営業外費用	
①支払利息	
経常利益=当期純利益	



取引と財務諸表との関係性①⑥

(1)事業を開始するにあたり、株主から300万円を出資いただいた(資本金)

(2)事務用品を現金10万円で購入した。

事務用品は資産として計上すべきか、費用として計上すべきか？

(3)家具・机・本棚等の事務用設備を現金50万円で購入した(5年間)。

(4)PCやプリンターなど工具器具備品を現金30万円で購入した(3年間)。

事業活動に活用する設備などで1年超で使用する長期の資産についてどのように損益計算に反映していくか？

(5)靴200足(原価単価10,000円)を現金で仕入れた。

(6)靴100足(単価15,000円)を売り、現金150万円を獲得した。

仕入単価が変化した場合、どの商品から売れたと考えるべきか？ 在庫の商品の価値が減少した場合の処理は？ 複数の商品を取り扱う場合の処理は？

(7)靴を新たに300足(原価単価10,000円)を仕入れた。現金100万円を支払い、残りは掛け(買掛金)。

(8)靴200足(単価15,000円)を販売。50足分(75万円)の現金を受取、残りは掛け(売掛金225万円)。

つけて売った場合に、どのくらい回収上のリスクにさらされているのか？ 回収不能が見込まれる場合の処理は？

(9)銀行から運転資金として200万円借り入れた。

(10)店員に給与を現金で支払った(2名分 30万円)

(11)テナントに家賃を現金で支払った(20万円)

(12)銀行に支払利息10万円を現金で支払った。

決算期と支払いタイミングにずれが生じた場合、どのように損益計算書や貸借対照表に反映していくのか？

(13)事務用設備の当期使用部分10万円を費用計上した。

(14)工具器具備品の当期使用部分10万円を費用計上した。

長期で保有することを想定している資産の価値が大きく目減りした場合、どのように会計処理を行うべきか？

現実の複雑な事業取引を前提とした場合、シンプルかつ体系的に会計処理・手続きのあり方を設定し、企業の経営成績、財政状態を公正かつ適切に表示できるような取り決めが必要＝簿記・会計。